「精神病院のない社会」
監獄型治療装置と決別するための映画です

大熊一夫監督 （日本の**Matto**の町を考える会代表） の思い

齢80歳にして初めて映画つくりに挑戦しました。といっても、新たに映像技術を究めて映画人の仲間入りを果たしたわけではありません。今回の作品は、いわば料理好きの小学生が握ったオニギリみたいなものです。

僕は50年以上も活字文化の世界で仕事をしてきましたが、実は、音声を伴った映像情報が目と耳から飛び込んでくる、あのド外れた影響力がずっと気になっていました。そこで、人生の最終局面を迎えて、イタリア映画『むかしMattoの町があった』に続く上映運動用の映画を作ろうと思ったのです。

では何を描くか…、もちろん、何十年もこだわってきた「日本の精神病院」に決まっています。

今から48年前の1970年、ジャーナリストの僕は、監獄のような施設つまり精神病院の存在に気が付きました（『ルポ・精神病棟』参照）。ですが、その後の15年もの長きにわたって、あの鬱陶しい施設を、「これは必要悪なのだ」と思いこんでいました。そんな愚かの極みの僕に、1985年、驚天動地の情報がもたらされました。

「イタリアは1978年に精神病院を全廃する法律をつくった」「1980年にトリエステという街は世界に先駆けて精神病院を完璧にやめた」「重い精神疾患の人々も地域精神保健サービスに支えられて自分の家で暮らしている」

これを平たく表現すれば、「精神病院なんか、もういりませんよ」という聞き捨てならない大ニュースなのです。

以来30数年、僕はトリエステに通ってきましたが、トリエステは僕の期待を裏切りません。近年は、トリエステのあるフリウリ・ヴェネツィア＝ジュリア州全体の精神保健が、“トリエステ化“されました。つまり130万人が住む州全体で、縛ったり閉じ込めたりのないトリエステ型の明るい地域精神保健サービスが実施されているのです。そしてなんと、「精神病院の時代は終わった！」という名の記念式典が2017年1月に州議会で執り行われました。

トリエステは精神病院をきっぱり閉じて、2019年で39年になります。ひるがえってわが日本ですが、いまだに世界に冠たる精神病棟閉じ込め政策の真最中です。

この対比を描く映画の題名は、しばし思案して、『精神病院のない社会』と相なりました。

上映会にご参集いただける皆様には、僕たちの渾身の労作『討論のしおり』というブックレットを用意しました。映画『精神病院のない社会』の鑑賞は無料ですが、有料のブックレットをお読みいただけますれば、日本の精神保健の弱点が、より明瞭に浮かび上がってくるはずです。

ブックレットの収益は、上映運動の事務費用に使わせていただきますが、運よく余剰金が出ましたなら、会独自の企画に回します。

大勢の皆さまに観ていただき、議論沸騰となれば、無上の幸せです。

作品は4場面に分かれる。第1章は、2021年に「この身体拘束を指示した医師の裁量は違法」との最高裁判決を勝ち取った大畠さん家族の話。第2章は大熊さんがインタビューに答える形で精神医療の闇を激白し、第3章は「浦河べてるの家」（北海道）の取り組みを前面に。そして第4章で、地域から精神科病院をなくした町の事例から、精神科病院なき後の目指すべき今後を見据えている。